

文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

だより



◀富坂(平成23年撮影)

▲富坂(『小石川区史』昭和10年発行より)

第18号／平成23年6月1日発行

| | |
|--------------------------|---|
| ぶんきょうには坂道がある | 2 |
| 伯爵家の町づくり —学者町・西片の誕生— | 4 |
| 開館20周年を迎えて | 6 |
| 新冊子刊行のお知らせ「絵でみて歩く 文京のまち」 | 6 |
| 平成22年度の あゆみ | 7 |
| 資料をご寄贈くださった方々 | 8 |
| 平成23年度の 催し | 8 |

ぶんきょうには 坂道がある

函館・日光・金沢・京都・神戸・尾道・長崎…坂の名所といわれる町のほんの一例です。日本には、このような坂の町・坂の名所といわれる場所が数多くあります。またこのほかに、伊香保・草津など名だたる温泉地の多くが、同時に坂の名所でもあります。

近年、こうした坂道を探訪するというのが大きなブームとなっています。そのなかにあつて、文京区の坂道は、文学・歴史を楽しむことができるスポットとして人気を博しており、多くの人びとが訪れています。

台地と谷がおりなす町 文京

文京区には、名前のわかっているものだけでも115か所以上、そのほか多くの坂道があります。地形上の理由としては、文京区が武蔵野台地の東端にあり、いくつかの谷に刻まれているということがあげられます。その台地と谷・低地をつなぐ道が、坂道になっています。



【図1】小石川区概見図（部分 『小石川区地誌』1928年発行より）
台地と谷がおりなす地形を見ることができます。

文京の坂道ゆかりの資料

文京ふるさと歴史館は、地域の歴史・文化に関する資料を収集・保存し、それらを活用して研究や展示等を行う地域博物館です。所蔵資料の内容は多岐にわたりますが、坂道を描いた絵画・坂道を写した古写真・坂が記された古地図なども多数あります。それでは以下に、そうした文京の坂道ゆかりの館蔵資料を、いくつかご紹介いたします。

江戸の切絵図に見る文京の坂道



【図2】谷中本郷駒込小石川辺絵図（部分） 1850年

図2は、江戸時代の切絵図「谷中本郷駒込小石川辺絵図」の一部分です。注目すべきは、絵図中の菊坂町と記される右わきに、「キクサカ」の記載があることです。ここは現在、菊坂あるいは菊坂通り（本郷四・五丁目の間）と呼ばれる坂道とは異なり、^{なしのきざか}梨木坂（本郷五丁目6と7の間）と呼ばれているあたりに該当します。菊坂に関しては、江戸時代の地図・地誌により位置の解釈が異なることがわかっています。この切絵図が間違いという可能性もありますが、むしろ現在にいたるまで、菊坂の位置に変遷があったのではないかと、あるいは、同時期にいくつかの坂道が菊坂と呼ばれていたのではないかと、さまざまな可能性が考えられます。

すべてが明らかになっているわけではありませんが、江戸時代から名前は受け継いでいても、位置や勾配などが相当に変化した坂道も、実は意外に多くあるようです。図2のような切絵図をはじめとした古地図、江戸の地誌などは、そうしたことを探る手がかりとして、とても重要な資料といえるでしょう。

ちなみにこの切絵図は、^{きんどうぼん}近音堂板と呼ばれるもので、絵図中（菊坂町とある上あたり）に「△ムネツキサカ」とあるように、坂上方向を△で示している場合もあり、江戸の坂道を理解するのに、たいへん便利なものとなっています。

古写真に見る文京の坂道



【図3】富坂（『新撰東京名所図会』1906年発行より）

図3は、『新撰東京名所図会』に「富坂」と掲載される写真です。同書には、「●富坂 富坂は。東京砲兵工廠の後背。即ち富坂町より春日町に下る坂をいふ。本年の春開通せし新道路は。西富坂町より直ちに下富坂町を貫きて。本郷真砂町に下れり。将来専ら此新道を往來することとなり。旧路は廃止せらるゝに至るべし」と記しています。つまり明治39年(1906)の春に新道路(春日一・小石川二の間)が開通され、旧路同様に、「富坂」として扱っていることを読み取ることができます。これをふまえて画像を見てみましょう。画像には、新道路を撮影したものか、あるいは旧路なのか、その説明はありません。しかし当時の地図等を参照すると、その形状から新道路と推定することができます。この後、明治40年代、この新道路には路面電車が走ることとなります。

この『歴史館だより』表紙に使用した写真は『小石川区史』(1935年発行)掲載の富坂画像です。路面電車の軌道があることから、それが『新撰東京名所図会』で言うところの新道路のその後の様子だということわかります。

ちなみに富坂(別名西富坂・飛坂・鳶坂など)の坂名由来は、このあたりに鳶が多くいたため、あるいは小石川台地と本郷台地の両側に坂道が向かいあっているため飛坂と言われたなどの説があります。

絵にみる文京の坂道



【図4】小石川にしとみ坂の図
歌川広景画
霊園～礒川公園あたりに該当すると考えられています。

図4は、江戸名所道戯尽のうち「小石川にしとみ坂の図」です。急勾配に描かれた坂を舞台に、犬の喧嘩に足を取られる棒手振や、転がる食べ物に大急ぎで飛びつく人びとの姿が、滑稽に表現されています。描かれる位置は、おのずと『新撰東京名所図会』で言うところの旧路周辺と考えられ、そこは現在の富坂(西富坂)よりさらに南側、東京都戦没者霊園～礒川公園あたりに該当すると考えられています。

絵画資料は、デフォルメされた表現が含まれることを考慮する必要がありますが、こうした滑稽な錦絵は、当時の坂道的情景を楽しみながら想像できる、貴重な資料だということも言えます。

文学作品に見る文京の坂道



【図5】左／『菊坂』(1951年 田宮虎彦 著)
右／『青年』(1913年 森鷗外 著)

森鷗外(1862-1922)著「青年」は、1910年より雑誌『スバル』に発表された後、1913年に単行本化されたものです(図5/右)。地方から上京した作家志望の学生(小泉純一)の苦悩と青春を描いたこの作品には、文京区内の描写が多くあります。とくに根津権現前の新坂(根津一丁目21と28の間)については、「割合に幅の広いこの坂はSの字をぞんざいのように屈曲して附いている」としており、この作品によりS坂の別名がついたと言われています。

1951年発行の『菊坂』(図5/左)は、独特の心理描写を味わうことのできる田宮虎彦(1911-1988)の作品集です。内容は、皇太子誕生の祝福にわく状況のなか、菊坂の薄暗い下宿で母死去の電報を受け取りつつも、母との「つながりの意識だけが、或ひは私の生きて行く力であつたともいへたかもしれぬ」と感じる主人公は、母の死を現実として受け止めることができません。そうしたなかでの菊坂町における下宿生活が続られる作品です。また『菊坂』に収められる「富士」という作品も、同様に菊坂町での下宿生活が続られています。

なお「菊坂」「富士」は、「私小説の形式をかりて、私の魂の歴史を書いたもの」とあとがきに記されています。

文京の坂道を舞台にした文学作品は多くあります。そして、現在なお生まれ続けていると言えるでしょう。

開館20周年記念特別展

今年度は、文京ふるさと歴史館開館20周年となります。秋に開催予定の記念特別展では、こうした坂道ゆかりの博物館資料をさらに一挙公開する予定です。地域博物館ならではの坂道の楽しみを味わっていただければと思っております。みなさまのご来館をお待ちしております。

(東條 幸太郎)

おもな参考文献

- 『江戸東京坂道事典』1998年 石川悌二著 新人物往来社発行
- 『江戸の坂 東京の坂(全)』2010年 横関英一著 筑摩書房発行

- 『ぶんきょうの坂道』2008年改訂 戸畑忠政編著 文京ふるさと歴史館発行

伯爵家の町づくり —学者町・西片の誕生—

現在の文京区西片^{にしかた}一・二丁目には、そのほとんどが旧駒込西片町にあたります。この町は、関東大震災や第二次大戦の戦災を免れ、明治・大正期の面影を今に伝えています。

福山藩阿部家の丸山屋敷

江戸時代の文京区域には、大小様々な大名屋敷がありました。それらの大名屋敷の中には、東京大学の敷地となっている加賀藩前田家の屋敷跡など、その姿を現在に伝えているものもあります。西片町には、江戸時代にこの地に屋敷を構えた福山藩阿部家の影響が、今も残されています。

福山藩阿部家は、安城以来の譜代家の一つとして徳川幕府に仕え、三代将軍家光の側近として有名な阿部正次、開国時の老中として活躍した阿部正弘など、代々の当主が幕政に深く関わってきました。阿部家では、元和3年（1617）に上総国大多喜城を与えられた後、相模国小田原城、武蔵国岩槻城、丹後国宮津城、下野国宇都宮城などを任せられ、宝永7年（1710）に備後国福山城（現、広島県福山市）に入ると、そ



【図1】尾張屋板『小石川谷中 本郷絵図』

の後は幕末にいたるまで福山を治めました。

嘉永6年（1853）の『本郷絵図』【図1】には、中山道と岩槻街道の追分付近に、阿部伊勢守の中屋敷が描かれています。この屋敷地は、慶長15年（1610）に正次が、二代将軍秀忠から10万坪余の土地を賜り、丸山屋敷としたことに始まります。白山から小石川に及んだともいわれる広

大な敷地は、その後何回か幕府に返納されましたが、幕末になってもまだ6万坪以上の敷地がありました。

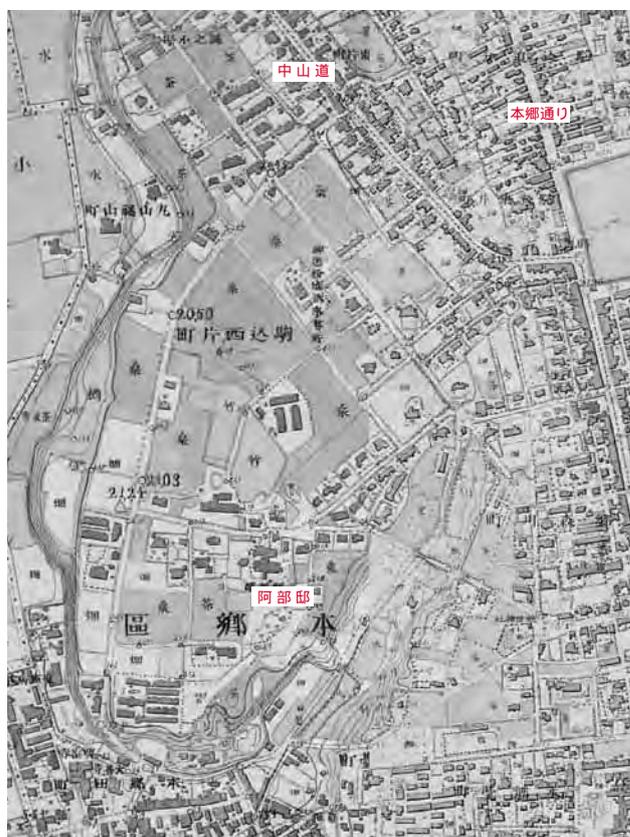
明治4年（1871）8月、明治政府は廃藩置県を行い、各藩知事に東京移住を命じました。阿部家においても、当主正桓^{まさたけ}が福山藩知事を解任され、11月に東京に移りました。それに先立つ明治3年正月、それまで本邸^{ほんぢ}としていた昌平橋門内の屋敷地を政府に上地していたため、正桓は旧中屋敷であった丸山屋敷を本邸としています。明治17年の華族令の公布に伴って、阿部家には伯爵位が授けられました。

西片町の誕生

江戸時代には、町名は町人が住む土地につけられるもので、武家地には正式な名前がありませんでした。このため阿部家が本邸とした旧中屋敷地にも、町の名前はありませんでした。

東京の都市計画が進み、武家地、寺社地、町人地などの区別がなくなっていくなかで、阿部家の土地にも名前が必要になりました。出口競著『学者町 学生町』によると、明治5年頃、阿部家の差配人篠田政兵衛が中山道を挟んで向かい側にあたる駒込片町の人達と話し合いをして、道の東側にあたる旧来の片町を東片町、西側の旧武家地を西片町とした、とされています。こうして阿部家の屋敷地には、駒込西片町という名前がつけられました。

明治16年の地図【図2】を見ると、この頃の西片町では、阿部邸と中山道沿いを除く大部分が、桑や茶などの畑地となっ



【図2】明治16年頃の駒込西片町

（財）日本地図センター『参謀本部5千分一東京図測量原図』より作成

ていたことがわかります。明治2年8月、政府は東京の旧武家地を対象にして、桑茶令と呼ばれる法令を出しました。これは、旧幕府の家臣や大名家の土地に桑や茶などの商品作物を植えることで、人口の抑制と殖産興業の一助にしようとした法令でした。阿部家では、東京に移住した頃から邸内に桑や茶を植え、養蚕室^{ようさんしつ}を建てるなど、養蚕や製茶を本格的に始めています。

また西片町には、藩士子弟の教育に力を入れていた阿部家の協力のもと、丸山屋敷内の藩校誠之館^{せいし しかん}を母体として、明治8年10月に第一学区第四中学区第十三番公立小学誠之学校（現、区立誠之小学校）が開校されました。

住宅地としての開発

阿部家には、土地の利用に関して記した帳面が何冊か残されています。その表題は、明治21年までが『殖産日記』、明治22年からは『不動産日記』『日記』となっています。阿部家では、既に明治5年には敷地内の長屋を貸し出し、借地・借家業に乗り出そうとしていましたが、明治22年頃から土地の利用を、殖産から不動産へと本格的に転換していったものと思われる。



【図3】土地利用に関する阿部家の帳面

当初の借地人には、福山藩出身の旧家臣が多かったようですが、前出の『学者町 学生町』によると、阿部家では「地代も殆ど無代同様（中略）家屋建築費の半額は阿部家に於て立て替」という、破格の条件で居住者を募っていたようです。その一方、湯屋や下宿屋などの商売は禁止され、阿部家の開発する住宅地が、閑静な住宅街を目指していたこともうかがわれます。

『殖産日記』などには、阿部家が道路や井戸の整備、下水溝やゴミ捨て場の管理など、インフラの整備を積極的に行っていたことが記されています。これらの資料からは、現在の西片を通る道路のほとんどが、明治20年代以前に阿部家によって整備されていたことがわかります。

この他にも、明治22年に街灯を設置、同32年には水道鉄管、同36年にはガス管を敷設するなど、新しい技術も積極的に取り入れて、町の整備を行っていました。

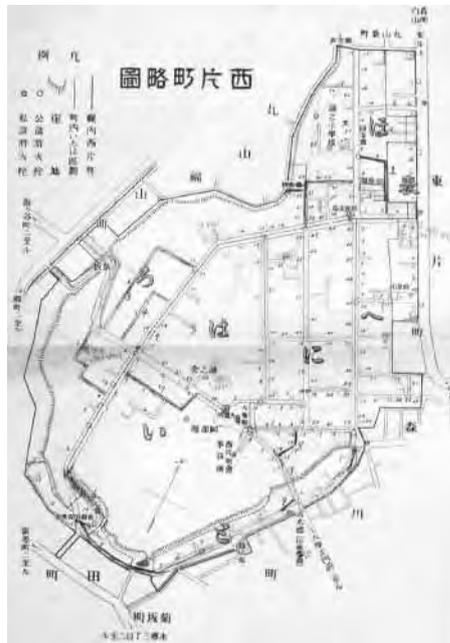
阿部家では、住宅地として西片町を開発を行う一方で、明治22年には、阿部家本邸の新築も行っています。

伊呂波号の地番

地租改正が行われ、土地に番号が付けられるにあたって、西片町では中山道沿いに1～22番、それ以外の畑地に23～29

番の地番が付されました。阿部家の邸宅は、このうち10番地とされましたが、この10番地が西片町の大部分を占めていました。

徐々に居住者を増やしてきた西片町では、明治21年、邸内の借地・借家が301戸に及ぶにあたり、邸内を7つに区分し、それぞれに伊呂波号を付して区別することになりました。



【図5】『西片町略図』（大正末年～昭和2年頃）

阿部家では、略図を配ったり、伊呂波号を示した傍示を建てるなどして周知をはかりましたが、始めて訪れる人にはわかりづらく、西片町付近の交番では、西片町の家を尋ねる人が多かったといわれています。

この伊呂波号に分けられた広い10番地が、西片町の特徴のひとつでした。

昭和39年に住居表示が改正され、現在では伊呂波号は使われなくなっています。

阿部家が住宅地として開発した西片町には、帝国大学などに近い事もあり、多くの学者・文人が居を構えました。その一例だけを挙げてみても、元良勇次郎（心理学）、坪井正五郎（人類学）、三好学（植物学）、武田五一（建築学）、田口卯吉（政治家）など、そうそうたる人物が居住しています。このため明治末年頃には、「学者町」と呼ばれるようになりました。（加藤 芳典）

【参考文献】

- 出口競『学者町 学生町』実業之日本社、大正6年
- 平井聖「大名屋敷跡地の住宅地形成に関する研究 - 本郷西片町の場合 -」『住宅総合研究財団研究年報』No. 23、平成6年



【図4】阿部家本邸（明治23年以降）

開館20周年を迎えて

当館は、『豊かな文京の地に繰り広げられた、「台地」と「坂」と「水」の織りなす歴史』を誰もが気軽に感じとることができることをコンセプトに、平成3年4月に開館しました。

地域の皆様に愛され、親しまれる歴史館づくりを目指して様々な調査・研究・展示に取り組み、昨年5月には40万人目の来館者をお迎えすることができました。さらには、本年4月に、開館20周年を迎えました。

これらの節目を無事迎えることができましたのも、区民の皆様並びに文京ふるさと歴史館友の会の皆様をはじめとする、多くの方々のご支援・ご協力の賜物と感謝を申し上げます。

今後も、先人の残した豊かな郷土の文化遺産を広く公開・保存し、後世に受け継いでいくとともに、豊富な歴史や文化財の情報発信に努め、本区の魅力を一人でも多くの方々に感じていただけるよう取り組んでまいります。

皆様方のご理解・ご支援をよろしくお願いいたします。



以下は、当館がこれまでに開催した「特別展」のあゆみです。なお、※は展示図録を販売中ですが、在庫がなくなり次第終了となります。

年度（年号は平成）

- 3※ ぶんきょうの仏たち—その心とかたち—
 - 4 森鷗外—ライフステージとしての文京—
 - 5※ 文京の絵画—その美と心—
 - 6※ 江戸の大名 高崎屋—下りました 廻りました—
 - 7 江戸の新興宗教—文京の富士講—
 - 8※ 本郷座の時代—記憶の中の劇場・映画館—
 - 9※ 本郷に生きたサムライの生涯—幕臣・官僚・明治維新—
 - 10 文京・まち再発見—近代建築からのアプローチ—
 - 11※ 文京公会堂とその時代
 - 12 版になった風景—文京名所案内—
 - 13※ 小石川と本郷の米物語—商う・作る・食べる—
 - 14※ 菊人形今昔—団子坂に花開いた秋の風物詩—
 - 15 樋口一葉 その生涯—明治の文京を舞台に—
 - 16※ 愛の手紙—文京ゆかりの文学者たち—
 - 17※ 近代建築の好奇心 武田五一の軌跡
 - 18※ 徳川御三家江戸屋敷発掘物語—水戸黄門邸を探る—
 - 20※ 博物館で見る—ぶんきょう食の文化展—
 - 21※ 実録!“漫画少年”誌—昭和の名編集者・加藤謙一伝—
 - 22※ 文京ゆかりの名優・花柳章太郎—その人と芸—
- （平成19年度は開催せず）

新冊子刊行のお知らせ「絵でみて歩く 文京のまち」



近年、都心にのこる歴史や文化の薫りを求めて、史跡めぐりや文学散歩が盛んに行われています。そこでこのたび、文京のまち歩きをもっと楽しんでいただくための冊子「絵でみて歩く 文京のまち」を刊行しました。

この冊子では、区内に点在する史跡や名勝を訪ねながら歩く4つのコースを設定しています。館蔵の江戸時代の切絵図や区内を描いた絵画もたくさん掲載しましたので、現在の風景と見比べながら歩くことができます。

ぜひこの冊子を携えて、往時の姿に思いを馳せながらのまち歩きをお楽しみください。

B5版 48ページ オールカラー 頒価 500円

頒布場所

- ・文京ふるさと歴史館1階
 - ・行政情報センター（文京シビックセンター2階）
- ※郵送希望の方は、本代1冊 500円と、送料（切手）210円を現金書留または郵便小為替にて当館までお送りください。

平成22年度の あゆみ

小・中学生のための歴史教室

「わがはい君調査隊 昔の町名、今はどこ？」

◆7月21日(水)～8月31日(火)

参加者数……161人



歴史教室

歴史講座

「朝鮮人参栽培と小石川御薬園 —徳川吉宗の秘策—」

講師：田代和生氏(慶應義塾大学教授)

◆10月9日(土) 会場：文京区男女平等センター

参加者数……78人



歴史講座

特別展

「文京ゆかりの名優・花柳章太郎 —その人と芸—」

◆10月16日(土)～11月28日(日)(延べ38日間)

入館者数……4,187人

◆映画上映会&ミニトーク

11月6日(土) 会場：文京区男女平等センター

上映作品：名刀美女丸(1945年制作 67分)

トーク出演：林靖治氏(資料寄贈者)

参加者数……82人

◆記念講演会

11月23日(火) 会場：尚美パリオホール

「花柳先生を語る」講師：水谷八重子氏(女優)

参加者数……281人

◆展示解説 10月17日(日)、10月26日(火)、11月10日(水)、11月8日(木)

◆花柳章太郎出演 映像上映(会期中随時)

上映作品：「湯島詣」(昭和31年)、「婦系図」(昭和36年)



特別展

収蔵品展

「子どもの遊びと学び —おもちゃ絵を楽しむ—」

◆2月12日(土)～3月21日(月)(延べ31日間)

入館者数……2,158人

◆展示解説 2月19日(土)、3月3日(木)、3月15日(火)



収蔵品展

ミニ企画

◆4月28日(水)～9月5日(日)「文京の町名今昔 新しい名前がつけられた！」

◆9月7日(火)～12月25日(土)「文京にあった温泉!?!—駒込草津温泉—」

◆1月5日(水)～4月17日(日)「弓町に住んだサムライ—田村家のヒトと学問—」



ミニ企画 文京の町名今昔

史跡めぐり

◆第1回 6月16日(水) 本郷ゆかりの文人たち

参加者数……39人

◆第2回 10月19日(火) 秋の六義園を歩く!

参加者数……31人

◆第3回 3月4日(金) 春、伝通院から印刷博物館へ…

参加者数……46人



史跡めぐり 6月16日

平成23年度の催し

ミニ企画

文京区と鷗外 —記念館誕生へ—

4月19日(火)～7月24日(日)

常設展示室2階のミニ企画コーナーで展示。その他のテーマにて、年度内に計4回のミニ企画展示を予定しています。

小・中学生のための歴史教室

わがはい君探検隊 昔のくらしを知ろう！

7月20日(水)～8月31日(水)

文京ふるさと歴史館の展示を見学して、昔のくらしについてのクイズに挑戦しよう！

開館20周年記念特別展

坂道・ぶんきょう展(仮)

10月22日(土)～12月4日(日) ※11月3日(文化の日)は無料公開日
絵画・写真・地図・文学作品など、文京の坂道にゆかりの深い博物館資料を一挙公開します。

史跡めぐり

年3回(6月、10月、2月)開催予定

歴史館友の会まち案内ボランティアが、区内の文化財や史跡等をご案内します。要申込(往復はがきにて)。

参加費(保険)40円と実費。

歴史講座

文京ゆかりの文学者と装丁デザイン —夏目漱石と橋口五葉を中心に—

9月23日(金・祝) 14時～16時

講師:岩切信一郎氏(新渡戸文化短期大学教授) 会場:男女平等センター
参加費:200円(当日に限り歴史館入館料無料) 定員:100人(超えた場合抽選) 申込方法:往復はがき(1人1枚)にて。締切:9月7日(水)必着

収蔵品展

伯爵家の町づくり —西片町ができるまで—(仮)

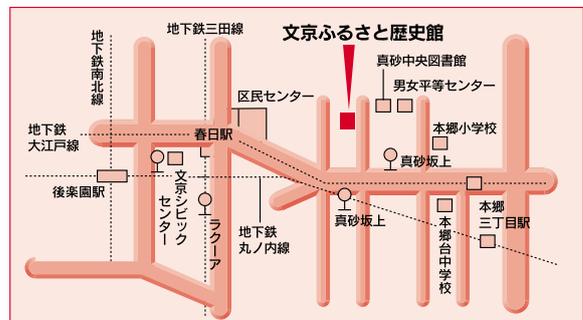
平成24年2月11日(土・祝)～3月18日(日)

阿部伯爵家によって、特色ある住宅地が作られていく過程を、阿部家から当館に寄贈された資料を中心に紹介します。

※事業内容の詳細は「区報ぶんきょう」および歴史館ホームページにてお知らせします。

利用の案内

- ◆開館時間: 午前10時から午後5時まで
- ◆休館日: 月曜日・第4火曜日(休日にあたるときは翌日)
くんじょう期間、年末年始
- ◆入館料: 一般個人100円、団体(20人以上)70円
中学生以下・65歳以上無料
*特別展は別に定めます
- ◆交通: 東京メトロ丸ノ内線・都営大江戸線「本郷三丁目」から徒歩5分
都営三田線・大江戸線「春日」から徒歩5分
都営バス 「真砂板上」から徒歩1分
文京区コミュニティバスB-ぐる「文京シビックセンター」または「ラクア」から徒歩10分
- ◆ホームページ: <http://www.city.bunkyo.lg.jp/rekishikan/>



文京ふるさと歴史館

〒113-0033 東京都文京区本郷四丁目9番29号 電話(03)3818-7221